

加賀焼の生産と流通



加賀焼を生産した窯跡 那谷ダイテンノウダニ2号窯跡は、焚口の奥で炎を左右分け、天井を支えた柱が良好な状態で残り、加賀焼の窯跡として注目された。

平安時代の末頃、粟津温泉に近い丘陵
平氏一門が加賀の国主を務めていた

地で、赤く焼き上がった加賀焼の生産が開始した。その製

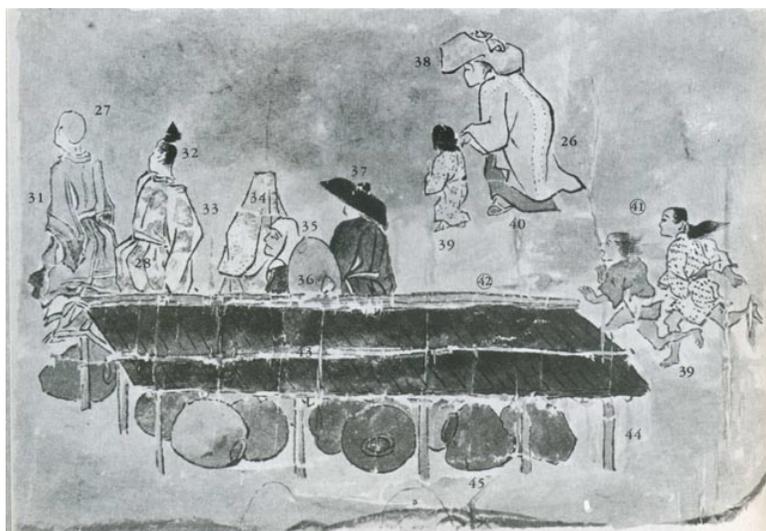
品は、日常生活などに使用された陶器の甕や壺、播鉢などで、加賀の国内で高まった需要から、尾張の常滑焼の窯場から職人を呼び、新しい製陶技術を導入したものであった。

これよりも以前、加賀地方でも常滑焼の甕は流通していたが、その消費者は国衙に近い荒木田遺跡や、荘園の政所が置かれた白江梯川遺跡に住宅を構えた在地の領主などに限られていた。また、能登半島の先端部で中世の須恵器生産を開始していた珠洲焼も、加賀の村里へ甕や壺、播鉢な



(押印の拡大)

那谷ダイテンノウダニ2号窯の大甕と播鉢 淡い橙色の焼物で、大甕は口径56cm、高さ75cmを測る。肩部の押印は、加賀焼独自の車輪状の二重菊花文である。



市庭に置かれた大甕『一遍上人絵伝』巻四部分（日本常民生活絵引第二巻より引用）
鎌倉時代の市庭では酒醸造用の大甕が軒に吊られて売られていた。大甕のみおいてあるため屋根が低い。

などを供給していたが、高まる需要を満たすものではなかった。
加賀焼は、このような状況で成立した加賀独自の中世窯業であった。鎌倉時代には、窯場の数も増加し、粟津の東群と那谷の西群に分かれている。大甕の製造技術が向上したことで、甕の

肩に押す木印（押印）の文様も、斜格子文から菊花文、さらには多彩な幾何学文へと発展している。また押印は、職人の印判とみられ、その文様は加賀焼の大きな特徴である。東西の両群で九三種を数える押印からは、東で三系統、西で二系統以上の職人集団が活動したと考えられている。

平安時代末に二ツ梨オクダ二窯跡から始まる加賀焼の生産は、南北町時代まで続き、一四群四六基以上の地下式の窖窯が稼働した。生産した加賀焼の甕や壺は、加賀三湖から梯川へと結ばれた舟運を経て、各地の市庭や町場へと流通した。このため製品の出土地は、加賀地方を中心に越前北部の九頭竜川流域から、越中西部の小矢部川西岸まで広がる。

主産とした大甕は、液体の長期保管に適した容器で、当時、加賀国内でも発達をみせた酒や酢の醸造をはじめ、染め物や死者の埋葬などに利用された。（垣内光次郎）



中世の墓地と加賀焼 南北朝時代の粟津牧姫塚では、加賀焼の大甕を使い土葬していた。また、室町時代の軽海中世墓では、火葬した遺骨を壺や甕に収めていた。



（遺跡に関する写真の提供、対象物の所蔵は小松市埋蔵文化財センター）